

ヘラートのヤール・モハンマド・ハーン

——一九世紀中期のイラン・アフガニスタン關係史——

小 牧 昌 平

はじめに

第一章 ヤール・モハンマド・ハーンの擡頭

第一節 ヤール・モハンマド・ハーンの登場

第二節 モハンマド・シャアのヘラート包圍

第三節 ヤール・モハンマド・ハーンのヘラート掌握

第二章 ヤール・モハンマド・ハーンのヘラート統治

第一節 ヤール・モハンマド・ハーンと周邊諸勢力

第二節 ヤール・モハンマド・ハーンとサーラルの反亂

第三節 ヤール・モハンマド・ハーンの外交政策

第三章 ヤール・モハンマド・ハーン死後のヘラート

第一節 ヤール・モハンマド・ハーンの死

第二節 サイド・モハンマド・ハーン以降のヘラート

まとめ

はじめに

一七四七年に成立したドッラーニー Durrānī (サッダーザーイー Saddozāī) 朝は現代アフガニスタンの原型となったこと⁽¹⁾

で知られているが、その後、一八一八年に當時のシャー・マフムード Shah Mahmūd (在位：一七九九—一八〇三、一八〇九—一八二六)の子でヘラートの太守 *hakeem* を務めていたカームラーン Kamran 王子が、自らの宰相 *wazir* でモハンマドザーイー Mohammadzā'i 氏族のファトフ・ハーン Fath Khan の権勢が強まったことを嫌ってこれを殺害したことから、その兄弟たちが一齊に反發し蜂起して、領内で自立を圖るようになった。これがいわゆる「アフガン内亂」(一八一八—一八二六)である。

この内亂の結果、アフガニスタンは、カーブル *Kabul* に據るファトフ・ハーンの弟のドースト・モハンマド・ハーン Dost Mohammad Khan (彼はカーブルを支配下に置いたことから一八三四年にアミール Amir al-Mu'minin を公式に稱した)、カンダハール Qandahār に據る同じくファトフ・ハーンの弟であるコハンデル・ハーン Kohandel Khan とその同母兄弟たち(カンダハール・サルダール Qandahār Sardar)、それから辛うじてカーブルを脱出してヘラート Herāt/Harat に據ることになったサッドーザーイー氏族のシャー・マフムードとその子のカームラーン王子の三勢力が鼎立することになった。

ここでは、ヘラートに残存したサッドーザーイー氏族の政權の中で、カームラーン王子の宰相として擡頭し、後には自らヘラートの支配者となったヤール・モハンマド・ハーン・アリコザイー Yār Mohammad Khan Alikozā'i という人物に焦點を當てつつ、カーブルやカンダハールといったほかのアフガニスタンの諸勢力との關係や、西隣のカージヤール Qajar 朝イランやイギリスとの關係を中心に検討していくことによって、一九世紀中期のヘラートの位置について明らかにしていきたい。

なお、ヤール・モハンマド・ハーンは一九世紀中期のアフガニスタン史やイラン・アフガニスタン關係史を検討する上では鍵を握る人物と見なされ、研究書などにその名が出てくることはそこそこにある。しかし、彼についての專論や彼を大きく取り上げた論考は少なく、主にベルシア語史料に據ったと思われるフェクラト Fekrat 氏のもの⁽³⁾、イギリス外交文書を中心に論を立てているシャンパーニュ Champagne 氏のもの⁽⁴⁾、後述のヘラートをめぐる英露の角逐を論じた中で彼

を取り上げているアマーナト Amanat 氏のものがある程度である。なお、時代的に彼と重なるドースト・モハンマド・ハーンを取り上げたノエル Noelle 氏の研究は、⁽⁶⁾意圖的にハリートを除外している。

ここでは、以下のアフガニスタン側・イラン側両方のペルシア語史料とイギリス外交文書の雙方に依據して議論を展開していった。

‘AW: Moḥammad Yūsof Rīyāzi Haravī; ‘*Ayn al-Waqāye‘—Tārīkh-e Afghānistān dar Sālha-ye 1207-1324Q*

(Moḥammad Āsof Fekrat Haravī ed., Tehrān, 1369/1990-1)

NT: Mirzā Moḥammad Taqī Lesān al-Molk Sepehr; *Nāsekh al-Tawārīkh—Tārīkh-e Salātin-e Qājāriyye*

(Moḥammad Bāqer Behbudī ed., 4 vols., Tehrān, 1353/1974-5)

RSN: Reżā Qolī Khān Hedāyat; *Tārīkh-e Rouzat al-Safā-ye Nāserī*

(10 vols., Tehrān, 1339/1960-1)

ST: Mollā Feiz Moḥammad Kateb Hazāre; *Sertāj al-Tawārīkh*

(3 vols., Tehrān, 1372-3/1993-5)

TS: Solṭān Moḥammad Khān b. Mūsā Khān Dorrānī; *Tārīkh-e Solṭāni*

(Bombay, 1881)

TZQ: Mirzā Fazlollāh Shīrāzī; *Tārīkh-e Zū al-Qarnain*

(2 vols., Tehrān, 1380/2001-2)

L/PS/9:L/PS/9/79-159

British Library, Indian Office Records in London

ペルシア語史料では、アフガニスタンの代表的史料である ST と TS、ハリートの人によって書かれた特徴的な史料である ‘AW⁽⁷⁾、カージャール朝の年代記である NT、RSN、TZQ を主に参照した。イギリス側史料は、イラン駐在のイギリス外交使節がイギリス東インド會社に送った報告書を集めた大英圖書館所蔵の L/PS/9 シリーズを利用した。

なお、本稿の引用文中においては、特別の指示がない限り、……は中略、() は原文のままであり、「」は筆者が付け加えたものである。

第一章 ヤール・モハンマド・ハーンの擡頭

第一節 ヤール・モハンマド・ハーンの登場

ヤール・モハンマド・ハーンの属するアリコザイー氏族は、アフガン人の中ではサッドーザイー氏族と同じ系統に入り、ナーデル・シャー Nadir Shah (在位：一七三六—一七四七) がアフガニスタンを征服したときには、その支配下に入った同氏族の武將の名が知られている。

しかし、ヤール・モハンマド・ハーン自身については、彼がカームラーン王子の宰相になるまでのことは史料には出てこないようである。彼について史料に現れる最初の記述は以下のようなものである。

カシミールの太守であるアブドッラー・ハーン ‘Abdullāh Khān 將軍の兄弟であるモハンマド・アター・ハーン・アリコザイー ‘Mohammad ‘Atā Khān Alikozaī’ が、アフガニスタン全土で流行っていたコレラで一二四四〔一八二八／九〕年に没すると、その甥でカシミールの太守であるアブドッラー・ハーン將軍の子のヤール・モハンマド・ハーンを彼の代わりに大將軍 (amir al-umara) とした。ヤール・モハンマド・ハーンは勇敢で shojā 寛大な sakhawāt 人物だったので、カームラーン王子は彼を宰相とした。(TS282-283)

なお、ヤール・モハンマド・ハーンが宰相に就任した當時、一八二八年にカームラーン王子は父のシャー・マフムードを追放しており、すでにヘラートの支配者となっていた。

ヘラートは、西方はカージャール朝、東南方はカンダハール、東方はカーブルに囲まれた弱小勢力に過ぎなかったため、その統治には細心の注意が必要だった。そのため、時にはアフガニスタンに勢力を伸張していた英國の庇護を求めざるを得ないこともあった。そのことを示すイギリス側史料として、次のものがある。

「ヘラートからペルシアにやってきたドイツ人冒険家の證言として、」カームラーン王子もヤール・モハンマドも、ペルシアのシャーやカンダハールの支配者たちがヘラートを攻撃することを思いとどまらせることを望んで、イギリス政府の保護を得ることを當然待望しているようだ。⁽⁸⁾

このようなヘラートの危機的な状況の中で、名目的な支配者であるカームラーン王子は無能で大酒飲みの人物であって、ヘラートの國政は實質的にヤール・モハンマド・ハーンが掌握していたという。そのことを伝えるイギリス側文書には、以下の記述がある。

カームラーン王子は無能で大酒飲みの習慣があり (a man of no capacity and of the most sotish habits)、彼は本當に有能で精力的なヤール・モハンマド・ハーンの掌中で飾りに過ぎないと見なされているだろう (he may be regarded as merely a pageant).⁽⁹⁾

それに對して、宰相のヤール・モハンマド・ハーン自身は、以下のカージャール朝側史料が示しているように、有能との評價が高かった。

ヤール・モハンマド・ハーンはアフガン「マ」の信頼おける武將の一人で、カームラーン王子の許において著名で成功した (nandar va kamran) 宰相であつた。(TIZQ 836)

このように、カームラーン王子とヤール・モハンマド・ハーンが對照的な能力の持ち主であつたことが、いろいろな形でヘラート政權の性格を決めていくことになったし、將來の政權交代劇を生み出すことにもなるのである。

第二節 モハンマド・シャーのヘラート包圍

カージャール朝は、その成立以降しばしばヘラートを包圍して、これを征服しようとしてきた。その最も顯著な例が一八三二年のことであり、皇太子アッバス Abbas 王子がヘラート攻撃に出陣してきた。カージャール朝がヘラートに固

執した理由の一つは、サファヴィー朝以来のイランの舊領を回復することにあったという (Razvi, 2000)。カージャール朝のこのような姿勢はすでに同朝成立直後から見られていたことは明らかになっている。皇太子の攻撃を免れようとして、使者としてマシュハド Mashhad に向かったヤール・モハンマド・ハーンがそのまま捕虜となり、しばらく留め置かれたこともあった (STI-163, 165)。この時のカージャール朝の包圍は、一八三三年一〇月のアッバース王子の急死によって中斷されてしまった。

一八三四年に即位したアッバース王子の子モハンマド・シャー Mohammad Shah (在位：一八三四—一八四八) はヘラート進軍を考えていたものと思われるが、王位繼承権をめぐる争いの処理やホラーサーン Khorasan 地方でのコレラの流行などがあり、實行までには時間がかった。しかし、ついに一八三七年一月にはモハンマド・シャーはヘラートに進軍して、これを七ヶ月にわたって包圍攻撃した。この際には、カーブルやカンダハール、さらにはヘラート内部からもカージャール朝に對してヘラート攻撃の要請があったという (STI-170)。このように、ヘラートは周邊諸勢力から絶えず狙われていたのである。モハンマド・シャーの包圍中は、ヘラートがカージャール朝の手に落ちて、同朝とその背後にいるロシアの影響力が擴大することを望まない英國が仲介を圖ったりした。例えば、シャーはイギリスのトッド F. Todd 少佐をヘラートに派遣し、ヘラート側の意向を探らせるとともに、イラン側の要求を傳えた。その時の模様について、イギリス側文書は次のように傳えている。

「トッドはヤール・モハンマド・ハーンとカームラーン王子に會見した。」ペルシアの國王陛下はそれまで要求してきたことをかなり修正し、ヘラートに城塞を置いたり國家の収入を賦課したりすることははや主張しなくなったが、……依然として、カームラーンがシャーの稱號を放棄し、ヤール・モハンマド・ハーンが自らの陣營に伺候することを要求した。⁽¹⁰⁾

これらのシャーの主張はイラン側の軟化を示すものではあったが、ヤール・モハンマド・ハーンがシャーの許を訪れるな

どといったことは、前述の通り、かつて同様の事態で彼が捕虜にされたことがあったことから、現実的には受諾は難しいものであった。そのため、この仲介は失敗に終わり、カージヤール軍のヘラート包圍は繼續された。

モハンマド・シャーがヘラート包圍に固執しているのに對し、そうした状況に大いに困惑した英國は、ペルシア灣のハールグ・Kharag 島を占領して、カージヤール朝側に撤退を要求した。カージヤール朝側はこの英國の強硬な姿勢には反抗できなかったため、シャーも包圍を續けることができなくなり、ヘラート側にある程度の譲歩をして問題の解決を圖ろうとした (S. H. 183)。その一方で、すでにこの頃にはカームラーン王子がヤール・モハンマド・ハーンの裏切りを懸念していたことを示す、以下のような史料がイギリス側文書の中から見つかった。

彼「カームラーン王子」は、シャーがここ「ヘラート」から撤退してしまつたら、ヤール・モハンマド・ハーンが自分の一族を裏切るだろうから、シャーにヤール・モハンマド・ハーンの排除を要望した。……シャーは、ヤール・モハンマド・ハーンがいなければ、カームラーンなどなきに等しい (without Yar Mahomed Khan, Kamran would be nothing)、それを恐れるとは彼は狂っている、彼は歳を取っているが、自分はヤール・モハンマド・ハーンが彼を傷つけるとは思わない、彼が恐れるべきなのは自分の息子たちであり、彼自身はヤール・モハンマド・ハーンを傷つける力は持っていない、と述べた。⁽¹⁾

カームラーン王子はすでにこの時点でヤール・モハンマド・ハーンの忠誠を疑っていたのであり、彼に對して強い危機感を持つていたことが明らかになる。しかし、そのような王子の疑念は、モハンマド・シャーなどからは、ヘラートの置かれている状況を考えると、とても正常な感覚とは思えなかったのである。

いずれにせよ、この時のカージヤール朝のヘラート包圍はイギリス軍のペルシア灣への介入によって、中止を餘儀なくされた。モハンマド・シャーは一八三八年六月にヘラートから撤退し、カージヤール朝によるヘラート包圍は終了した。

第三節 ヤール・モハンマド・ハーンのヘラート掌握

一八三八年一〇月一日のインド總督オークランド G. E. Auckland の發したシムラ宣言 Simla Manifesto によるドースト・モハンマド・ハーンへの宣戰布告で第一次アフガン戰爭が勃發し、翌一八三九年以降、イギリス軍がアフガニスタン領内に進攻してきた。同年四月にはカンダハールが、八月にはカーブルがイギリス軍に占領されたため、ドースト・モハンマド・ハーンは北方に逃走し、ついにはブハラ Bukhara にまで至ることになったのである。このようにして、アフガニスタンの主要部分はイギリス軍によって制壓された。

そうした中で、すでにヘラートにはポッティンガー E. Pottinger 少佐などイギリス軍將校が連絡要員として駐在していたが、多數のイギリス軍のアフガニスタン進攻は、當然ヘラート政權にも大きな危機感をもたらしたようである。そのような状況の中で、カームラーン王子はイランに服従の意向があることを表明して危機を脱しようとした。それは次のイギリス側文書から明らかである。

ヘラートから使者が「テヘランに」届き、カームラーン・シャーとヤール・モハンマド・ハーンのそれぞれの息子がマシユハドに進み、そこからテヘランに向かっているという。この使節の目的は明らかではない。……「しかし、ある情報によれば、第一次アフガン戰爭による」イギリス軍のアフガニスタン侵攻に驚いたカームラーン・シャーが「ホラーサーン太守の」アースフ・アッドウレ Allāh Yār Khān Āsof al-Doule Qājār に「ベルシア領に自ら入る用意があることを暗示してきた」という。⁽¹²⁾

また、その一方で、ヤール・モハンマド・ハーンはアフガニスタンに侵攻してきた英國と英國が新アフガニスタン國王として擁立しようとしたその傀儡であるショジャー・アルモルク Shoja' al-Molk (カームラーン王子の叔父) には屈しない強い意向を示した。その点については、次の史料がある。

(ホラーサーン太守の) アーソフ・アッドウレがここ「デヘラン」に(ヘラートの宰相である) ヤール・モハンマド・ハーンからの書簡を送ってきたが、「たとえ私が公には彼らと友好的で、実際には貴殿の臣下であったとしても、決してヘラートはイギリスとシヨジャー・アルモルクの手中には渡さなう」(I will not give Herat into the hands of the English and Shooja ool Moolk)」と書いてあった。⁽¹³⁾

アフガニスタンに侵攻してきた英國は當然ヘラートも軍事目標にすることが考えられたため、ヘラートはカージャール朝への接近も圖った。そのことを記したイギリス側文書には、以下の通りある。

マシユハドに派遣されていた外務卿ミールザー・マスウード Mirza Mas'ud が宮廷に書状を送り、ヘラートの宰相であるヤール・モハンマド・ハーンが、英國に對抗してホラーサーン太守の支援を熱心に求め、もしペルシア政府が英國軍追放を可能にしてくれるなら、自分の息子の一人をマシユハドに人質に出すことを提案したと傳えた。⁽¹⁴⁾

しかし、カージャール朝の支援に對する期待は必ずしも叶えられたとはいえなかったようである。このため、ヤール・モハンマド・ハーンは危険を冒して英國への接近も視野に入れていた節が次のイギリス側文書から窺える。

最近ヘラートの問題に關する情報は受け取っていないが、ヤール・モハンマド・ハーンはペルシアに支援を求める無益さに氣付き、インド政府から彼に對してなされた和平の提案におそらく應じようとしているように私「イラン特命全權公使シェイル J. Seill」には思える。⁽¹⁵⁾

このように、第一次アフガン戦争當時のヘラートは、強國のイギリスやカージャール朝にはさまれて、事態の進展の中で、小國としての運命に翻弄されていたことが窺えるのである。

やがて一八四一年に入つて、アフガニスタン各地で反英蜂起が起ころうになり、イギリス軍はその鎮壓に手こずるに至つた。⁽¹⁶⁾ やがて、反英蜂起は全國的規模のものになり、イギリス軍は敗戦を重ねていき、ついに一八四二年初め、イギリス軍がカーブルから最終的に敗走して、第一次アフガン戦争が終結した。

それとほぼ時を同じくして、ヤール・モハンマド・ハーンは一つの決断をする事になった。無能な君主であったカームラーン王子を倒して、ヘラートの實權を奪取することであった。このことは一八四二年八月に實現された。それを伝える史料として、以下のものがある。

この年、ヘジュラ曆一二五七年、すなわち西曆一八四一年「ママ」、宰相のヤール・モハンマド・ハーンはヘラートや領域の他の地點における有力者と同盟し、カムラーン・シャールに反抗して彼を捕え、イランとの境界のクーフサヴィーエ Kuhsavīye に送り、クーヘサーン Kūhesān 城塞の北東の塔に彼を投獄した。七ヶ月後、ダーウード・ハーン・アフガン Daūd Khan Afghān 將軍をクーヘサーンに送り、カムラーン・シャールを夜に絞首してこのように殺害し、遺體をヘラートのロウゼ庭園 (Rouze Bagh) に埋葬した。彼の子供や一族は殺害されたり投獄されたりし、残りの者たちはイランに逃走した。ヘラートやファラーフ Fārah とその領域は完全に宰相のヤール・モハンマド・ハーンのものになった。イラン政府には服従を表明し、しばらく後にはコインとホトバ Khoṭba をイラン皇帝の名で讀むことを實行した。(AW 37-38)

イギリス側文書にも、カムラーン王子の殺害以前の段階で書かれたものであるが、ヤール・モハンマド・ハーンが彼を捕えて權力を奪取したことを伝える文書がある¹⁷⁾。こうして、ヤール・モハンマド・ハーンはカージャール朝に忠誠を誓いつつ、ヘラート政權の經營を行っていくことになった。

第二章 ヤール・モハンマド・ハーンのヘラート統治

第一節 ヤール・モハンマド・ハーンと周邊諸勢力

このようにして、ヤール・モハンマド・ハーンはヘラートでの實權を掌握した。しかし、彼がヘラートという小國を統

治していく上では、周邊諸勢力との関係には最善の注意を拂う必要があったことは確實である。そのためには、カージヤール朝にばかり依存することは得策ではないと考えていたようである。この當時のカージヤール朝は西方のオスマン帝國との間で境界をめぐる紛争に追われていて東方を見る餘裕はなかったが、その問題が解決しさえすれば、またヘラート征服を狙ってくる可能性も十分に考えられたのである。

そのため、ヤール・モハンマド・ハーンはさまざまな對應を採ろうとした。例えば、この當時カージヤール朝との關係が悪化していたブハラのアミールに接近したりした。それは、次のイギリス側文書で明らかになる。

しばらく前、宰相「ヤール・モハンマド・ハーン」は使者をブハラのアミールの許に送り、自らアミールの召使いで臣下であると宣言し、ヘラートと残りのアフガニスタンはアミールのものであり、ペルシアへのいかなる服従も放棄すると傳えた。⁽¹⁸⁾

さらに、從來警戒して距離を保っていた英國とも一定の關係を持とうと畫策したりした。このことは、以下の文書で明らかになる。

「ヘラートにいたかつてのヤール・モハンマド・ハーンの重臣から書簡が届いた。それによれば、」イギリス政府がヤール・モハンマド・ハーンとの友好的關係を更新する方針があるのなら、……その目的實現のために自分は最善を盡くすだろう、と傳えてきた。……私「シェイル」は彼の提案を本國政府に傳えると答えた。⁽¹⁹⁾

また、アフガニスタンの他の諸勢力との關係改善にも努めようとした。その一方策として、カーブルやカンダハールのモハンマドザイー氏族の勢力と姻戚關係を築くことで、ヘラートの地位を確保しようとした(AW 49-50)⁽²⁰⁾。しかし、カンダハールのコハンデル・ハーンのようにあくまでもヘラート征服を狙うものもあり、ヤール・モハンマド・ハーンにとって豫斷の許せない狀況が續いたことは事實である。そのような狀況は、例えば次のイギリス側文書からも明らかにする。

カンダハールのコハンデル・ハーンの息子がラーシュ [Lash] 近郊のジャヴィーン [Javin] まで進軍し、「反ヤール・モハンマド・ハーンの」シャー・バサンド・ハーン Shah Pasand Khan と合流し、カンダハールの支配者はホラーサーン太守に書簡を送って、その地方に居住する全てのアフガン族長たちがヤール・モハンマド・ハーンからヘラートを奪取する息子の努力を支援することの許可を求めた。……コハンデル・ハーンは、もしペルシア政府が軍隊と資金を提供するなら、陛下のためにヘラートを占領するとシャーに書簡を送ったが、ヤール・モハンマド・ハーンも、カンダハールの支配者に對抗するために同様の援助を與えるよう、シャーに要求した。……コハンデル・ハーンとシャー・バサンド・ハーンの連合軍は三千にも満たないが、彼らの目的を達成するために、ヘラートの住民に彼らの支配者に對して反亂を起こすように煽動しようとしている。⁽²¹⁾

その一方で、ヤール・モハンマド・ハーンはヘラート近郊の弱小諸勢力を服従させてヘラート政權の權力を確固たるものにし、それを背景にカージャール朝やその出先のホラーサーン太守との關係を構築していくこともあったようである。それは以下のイギリス側文書にも現れている。

彼「ヤール・モハンマド・ハーン」は自分自身とかつて對立していたが今や彼の權威を認めている族長たちとの關係を修復することによって、ヘラート支配を強化しているようである。マシユハドから私「シェイル」に届いた報告によれば、「ホラーサーン太守の」アースフ・アッドウレとヤール・モハンマド・ハーンとの間には、頻繁で友好的な交流があるという。⁽²²⁾

カージャール朝と並んで、當時アフガニスタンに影響力の擴大を圖っていたイギリスに對しても慎重な對應を採っていた。イギリスがカーブル政權やカンダハール政權との結びつきを強めるようになると、一八四五年には次の通りイギリスとの關係を斷つ決定を行った。

この年（ヘジュラ暦一二六二年、すなわち西暦一八四五年）、宰相のヤール・モハンマド・ハーンはヘラートとその領土に

イギリス政府の將校や臣民が来ることを完全に禁止し停止した。一二五三年にヘラートに居住するようになったイギリスの將校たちについては、宰相のヤール・モハンマド・ハーンは彼らを一二五七年に追放した。イギリス側はこの問題を自らの諸目的を推進していく上で混亂の要因になるとし、あらゆる手段でヘラート領への影響力を見出そうとした。宰相のヤール・モハンマド・ハーンは彼らの影響力が自らの統治を破壊する要因になると知っており、この年、この政權の高官たちと交際することを完全に拒絶した。(AW 45)

しかし、この對英斷交の決定は、當時ヘラートの置かれていた状況やイギリスの立場から推測して、必ずしも長期にわたって繼續したものとは考えられない。

第二節 ヤール・モハンマド・ハーンとサーラールの反亂

一八四七年にマシュハドを中心とするホラーサーン地方で、前のホラーサーン太守アーンソフ・アッドウレの息子であるサーラール Mohammad Hasan Khān Sālār Qājār の反亂が起った。この反亂自體、カージャール朝内部の支配構造の變化を考えていく上で非常に重要な事件だと思われるが、それについては本稿の關心とは離れるので、ここでは言及を避けることにする。⁽²³⁾

反亂がヘラートに隣接するホラーサーン地方で起こって擴大化し、ホラーサーン太守のハムゼ Jahāne 王子がマシュハドに追いつめられるまでに事態が深刻化したため、ヤール・モハンマド・ハーンもこれに關與することになった。イギリス側文書では次のように記されている。

數日前、ヤール・モハンマド・ハーンからの使者がテヘランに到着し、シャーへの忠誠と服従を心から表明し、ホラーサーンの混亂「サーラールの反亂」に對する支援を申し出た書簡を持ってきた。⁽²⁴⁾

ヤール・モハンマド・ハーンは反亂軍・ホラーサーン太守雙方に支援を期待されていた。特に反亂軍が優勢になり、ハ

ムゼ王子がマシユハドの城塞に籠城を強いられる事態に至ると、ヤール・モハンマド・ハーンの動向は反亂の成否を決めるほどの注目点になっていった。それについての彼の對應は次のようなものであった。

サーラールはジャアファル・コリー・ハーン・コルド・シャードルー Jāfar Qolī Khān Kord Shādūr を使者に派遣して要請したので、ヘラートの太守 ^{ḥāḥ} であるヤール・モハンマド・ハーンが大軍で援軍に駆けつけると信じていた。ハムゼ王子は要塞の狭い場所に隠れ、牧草や食料が少なくなったので、兵士たちは馬やラバの肉を食料にしていた。……ヤール・モハンマド・ハーンはジャアファル・コリー・ハーンに判らないように配下のミールザー・ボズルグ・ハーン・カライー Mirza Bozorg Khan Qarā'i をハムゼ王子の許に送り、自らは貴官に服従すると言上した。……ヤール・モハンマド・ハーンはジャアファル・コリー・ハーンとともにジャーム ^{ḡām} 地方に至り、そこからジャアファル・コリー・ハーンに判らないようにハムゼ王子に書簡を送り、サーラールの支援のためではなく汝の支援のために來たと傳えた。……ハサン・ハーン・サーラールはヤール・モハンマド・ハーンをマシユハドで待ち受けたが、ヤール・モハンマド・ハーンに對して不安になった。……翌日、街の住民が出て待っていたが、ヤール・モハンマド・ハーンはジャアファル・コリー・ハーンにまず城塞に行く²⁵と伝え、城塞に向かった。……街の住民は戦闘になることを知った。ヤール・モハンマド・ハーンは城塞に向かい、大砲や兵士を従えて街の住民との戦闘を控えて城塞に入り、ハムゼ王子に服従の意を表した。……街の住民はヤール・モハンマド・ハーンがもはや味方でないことを知った。……数日後、ヤール・モハンマド・ハーンが城塞から出てくると、サーラールは住民を率いて戦闘に出た。……ヤール・モハンマド・ハーン軍は敗れて、大砲を放置して城塞に入った。ヤール・モハンマドは王子にヘラートに行つて冬を越すように提案した。(NFS-199-201)

つまり、ヤール・モハンマド・ハーンはマシユハドに出兵した際にはホラーサーン太守を支援し、彼を救出してヘラートに一時的に連れ歸つたのである。この事件はこの反亂の趨勢を左右するほどのものであったと考えられる。⁽²⁵⁾

結局、一八五〇年四月に鎮壓されたサーラルの反亂におけるヤール・モハンマド・ハーンのカージャール朝に対する貢献に關しては、イギリス側史料とペルシア語史料との間では、若干ニュアンスの違いが見られるようである。イギリス側史料は、次のように述べている。

私〔駐イラン公使館附き武官フアラント F. Farrant 少佐〕は閣下〔カージャール朝宰相〕に、ヘラートの指導者〔ヤール・モハンマド・ハーン〕がホラーサーンに關していくらか理解を持つていることを傳えた。私は彼に、このよく知られた陰謀者にきわめて注意するべきであり、彼は信賴すべきではなく、多くの問題を引き起こすだろうと忠告した。閣下はこの報告の信憑性は否定したが、ヤール・モハンマド・ハーンが危険で詐欺的な人物であることには合意した。⁽²⁶⁾これに對し、アフガニスタン側のペルシア語史料にはこのときのヤール・モハンマド・ハーンの對應について、次のような記述が見られる。

冬の間、彼〔ハムゼ王子〕を「サーラルから」匿った。春になると、テヘランから援軍が届き、王子も兵を率いてマシュハド征服に向かい、宰相〔ヤール・モハンマド・ハーン〕は同時に行つた奉仕の代償として、四門の大砲とクーフ・クープの彈 [Tōpe Kūh Kūb クーフ・クープとは傳説上の勇者ファルハド Farhad のことで、下賜された砲彈の美名と思われる] とともに、Zahir al-Doule 「國家の支援者」の稱號を得た。……宰相はこのことからカージャール政權との友好關係を強めた。^(TS 387)

つまり、イギリス側の史料が、ナーセル・アッディーン・シャアの最初の宰相であるアミール・カビール Mirza Taqi Khan Amir-e Kabir (一八〇七—一八五二) が彼を警戒する發言を行つたと述べているのに對し、アフガニスタン側史料では Zahir al-Doule の稱號を得て、カージャール朝との友好關係を強めたことが述べられている。⁽²⁷⁾

こうしたカージャール朝との良好な關係を示す一つの事例として、カージャール朝の政策を模倣して近代的な歩兵隊がヘラートに創設されたことが挙げられよう。これについては、ペルシア語史料に以下のような記述がある。

ヘジュラ暦一二六五年、すなわち西暦一八四八年、ヘラートに、イランの軍事法に従って、五つの歩兵部隊 (*fawj-e piyade-nezam*) ができて軍事訓練を受けた。各部隊は五百人から成っており、各部隊に一人の將軍 *sarip* と一人の少佐 *yawar* が置かれた。將軍は皆宰相のヤール・モハンマド・ハーンによって選出された者であった。……この部隊の兵士は皆高いフェルト帽をかぶっており、周囲はさつねと子羊の皮からできていた。各部隊には音楽隊 (*dastgah-e musiki*) が置かれ、音楽隊は木の色をした金属製の樂器を用意した。各部隊は銃で武装していた。……これらは皆イラン政府の支援によるものであった。宰相のヤール・モハンマド・ハーンはこれら皆の支援を求めたわけではなく、この年、數人の大佐 *sarhang* と數人の少佐がヘラートの騎兵隊に選出された。(AW 4849)

カージャール朝においては既に一八一〇年代から軍隊の近代化に着手していたが、一八四八年のナーセル・アッディーン・シャーの即位とアミール・カビールの宰相就任で軍隊近代化が推進されたのであり、ヤール・モハンマド・ハーンはそれを受け入れて自國の軍隊の改革に乗り出したのであろう。

第三節 ヤール・モハンマド・ハーンの外交政策

しかし、ヤール・モハンマド・ハーンはカージャール朝との関係を強化していただけではなかった。この當時、この地方に強い關心を持っていたヨーロッパ列強はイギリスとロシアであった。イギリスはインド植民地の防衛とロシアの南下を阻止するために、モハンマド・シャーのヘラート包圍當時の全權公使マクニール J. McNeill や一八五〇年代の全權公使シェイルに見られるように、カージャール朝に對してはかなり強壓的な態度で臨み、そのために、ナーセル・アッディーン・シャーなどはロシアに接近する姿勢を示すほどだった。

ヘラートに關してイギリスがどのような對應を採っていたのかは、イギリス側史料にも現れないので不明である。しかし、前述のように、ヘラートがイギリスとの関係を斷絶する決斷をしたことがあったことから明らかなとおり、イギリ

スはカージャール朝に對するのと同様、ヘラートに對してもかなり強壓的な姿勢を示していたことは十分に想像できる。

このため、ヤール・モハンマド・ハーンは、カージャール朝だけではなく、ロシアとも接近することによって、その自立性を維持しようとしたことが考えられる。そのことを示すイギリス側文書に、以下のものがある。

ロシア公使とケーブル及びヘラートの支配者との間で、最近いくつかの連絡が取られた。テヘランに今いる後者「ヘラート」の使者は絶えずロシア公使館を訪問しており、私「ファラント」が理解しているところでは、ロシア公使によって彼の召使いの一人がケーブルとヘラートに書簡を持って派遣された。⁽²⁸⁾

當然、ヘラートやケーブルのこのような行動はイギリス側には望ましくない危険な兆候だったわけで、外交文書に取り上げられているわけである。

このような軍隊の近代化や周邊諸國との關係強化によって、ヘラートは繁榮を取り戻していったようである。そのことを伝えるイギリス側文書に次のようなものがある。

「マシユハドとヘラートからヘラートの状況を伝える二通の書簡が届いた。」これらの通信の中には相互に差違があるが、私「シエイル」は、ヤール・モハンマド・ハーンが繁榮した状況にあるというマシユハドからの書簡をより信頼する。最近のマシユハドからの大量移住が、前のシャアの包圍による人口減少を補うことによって、ヘラートの繁榮に貢献しているに相違ない。通商はヤール・モハンマド・ハーンに保護され、彼のマシユハドやマイマナ Maymana⁽²⁹⁾ への軍事遠征は、彼の力を示している。

こうした記事の中に、ヤール・モハンマド・ハーンの巧みな外交術を見て取ることができるように思われる。彼はカージャール朝やロシアと良好な關係を構築することで、カンダハールやケーブルといった潜在的に對立するモハンマドザイー氏族の勢力の侵入を阻止するように手を打ったのである。實際、カンダハールのコハンデル・ハーンが侵攻してきたときには、ヘラートの防備を固めている。それについては、次のようなイギリス側の文書が残っている。

テヘランに到着した尊敬すべき人物によれば、一ヶ月半前、カンダハールの支配者がギリシク *Grisak* のヘラート側に一萬二千の兵を率いて、ヘラートを包圍するために進軍した。ヘラートに到着すると、彼はヤール・モハンマド・ハーンが防衛の準備をしており、非常に驚いているようだったという。⁽³⁰⁾ このときも、ヤール・モハンマド・ハーンはコハンデル・ハーンの攻撃を免れ、ヘラートの獨立を維持することに成功した。

第三章 ヤール・モハンマド・ハーン死後のヘラート

第一節 ヤール・モハンマド・ハーンの死

このように困難な状況に對してうまく立ち回っていた最中に、ヤール・モハンマド・ハーンは、一八五一年六月七日、急死した。彼の死去については、ペルシア語史料では例えば次のように傳えている。

ヘラートの支配者であるヤール・モハンマド・ハーン・ザヒール・アッドウレは、ラーシュとジャヴィーンを征服した後、體調が悪くなり、歸還することになった。サブゼワール *Sabzevar* 經由でヘラートに向かったが、彼の體調は悪くなり、没した。彼の遺體はヘラートに運ばれて追悼が行われ、一二日後、彼の長男のサイード・モハンマド・ハーン *Sa'id Mohammad Khan* 將軍をヘラートのハーンや有力者たちは支配者の座に就け、服従の意を示した。
(*AW* 51)

これに對して、イギリス側の文書では次のように彼の死を傳えている。

前シャーの弟ファルハード *Fahrad* 王子が、本早朝、ちょうど私「シェイル」の使者がエスファハーンに出ようとしているときに、私を訪ねてきて、三日前にホラーサーンから急使がヤール・モハンマド・ハーンの死についての明確

な情報を持って到着したと語った。……私はまた、今朝、テヘランのゼイン・アルアーベディー・Zein al-'Abedin から書簡を受け取り、マシユハドからヘラートの支配者の死を伝えてきたという。⁽³²⁾

左記のベルシア語史料にもあった通り、彼の後継者には、長男であるサイド・モハンマド・ハーンがつくこととなった。しかし、豫期せぬヤール・モハンマド・ハーンの急死のため、それまで彼自身の卓越した才能によって築き上げられてきたヘラート防衛のための方策を継承できる者は誰もいなかった。

それに加えて、後継者となったサイド・モハンマド・ハーンの長男は、資質的には、その父に到底及ぶべくもない凡庸な人物だったようである。そのことを示すベルシア語史料として、次のようなものがある。

ヘラートの統治者で宰相のヤール・モハンマド・ハーンの子のサイド・モハンマド・ハーン將軍は、知性に缺ける (noqsān-e 'aql) ところがあり、少しずつ精神錯亂を起こした (kam kam khabi-e demāq, yāfī)。日々軍を集めて行進を見學するために召集し、軍の閥兵のときに有力者や高官に譯の分からないことを言うことがあった。(AW 56)

卓越した才能を持っていたヤール・モハンマド・ハーンの統治下でさえ、周邊諸國から狙われていた弱小國のヘラートは、そのような凡庸な人物の統治下では、格好の標的とされることは避けられなかった。實際にまずヘラートを狙ったのは、カンダハールのコハンデル・ハーンであった。

ヘラートの住民の中には、サイド・モハンマド・ハーンの愚かさから、彼に満足できずに怒った者がおり、祕かにコハンデル・ハーン將軍に書簡を送り、ヘラート征服を促した。彼はヘラート住民の要望によってカンダハールからヘラートに向かい、ファラーフとエスファザール Estāzār を征服した。マシユハドの太守であるソルターン・モラード Solṭān Morād 王子はこれを知ると、「[軍を]ヘラートに向かわせ、ヘラート近郊に留めた。……[兩軍は戦闘となったが]コハンデル・ハーンは進軍できず、カンダハールに歸還することになった。(ST2-24)

ヤール・モハンマド・ハーンの死を好機と捉えて、ヘラートの不満分子からの招請もあって、直ちに侵攻したコハンデ

ル・ハーンに對して、ヘラート救済に立ち上がったのはカージャール朝のホラーサーン太守であつた。このように、カージャール朝はあくまでもサイード・モハンマド・ハーンの支援の立場を採ることになった。しかし、カージャール朝側もヘラートの状況を相當不安の目で見ていたことが、次のイギリス側文書で明らかになる。

この「カージャール朝」宮廷の誰もが、サイード・モハンマド・ハーンの統治が長續きするとは考えていない。内紛やコハンデル・ハーン、またはドースト・モハンマド・ハーン、カムラーン・シャーの一族による攻撃が……直ちに彼の權威を終焉にもたらすと信じられている。⁽³³⁾

このように、カージャール朝側はサイード・モハンマド・ハーン政權を支援しながらも、周邊を敵に取り圍まれた彼の政權が長續きするとは豫想していなかつたのである。ほぼ唯一の支援國からも、すでにヘラートは見放されていたのである。

第二節 サイード・モハンマド・ハーン以降のヘラート

その後のヘラートについて詳しく述べる餘裕はないが、サイード・モハンマド・ハーンの統治は四年少々しか續かなかつた。彼の能力からすると、長續きした方かもしれない。結局、彼は一八五五年九月に殺害されてしまつたので、アリコザイー氏族のヘラート支配は二年間續いたことになる。彼に代わつてヘラートを一時統治したのは、サッドーザイー系のモハンマド・ユースフ Mohammad Yūsof 王子（シャー・マフムードの弟の孫）であつたが、彼の統治も長續きせず、一八五六年四月には失脚して殺害されてしまつた。また、一八五六年四月には再びカージャール朝がヘラートを包圍した。この時もイギリスはペルシア灣岸のブーシャフル Būshahr を占領するなどの干渉を行い、カージャール軍は一八五七年五月に撤退を餘儀なくされてしまつた。一八五八年のパリ條約でカージャール朝はヘラートの請求權を完全に放棄させられた。結局、一八六三年五月末、死の直前であつたドウースト・モハンマド・ハーンはヘラートを陥落し、ヘラー

トはその支配下に入ることになったのである。⁽³⁵⁾これによって、すでに一八五五年にカンダハールはドゥースト・モハンマド・ハーンの支配下に入っていたため、北部（「小トルキスタン」）を除いたアフガニスタンが統一されたことになった。

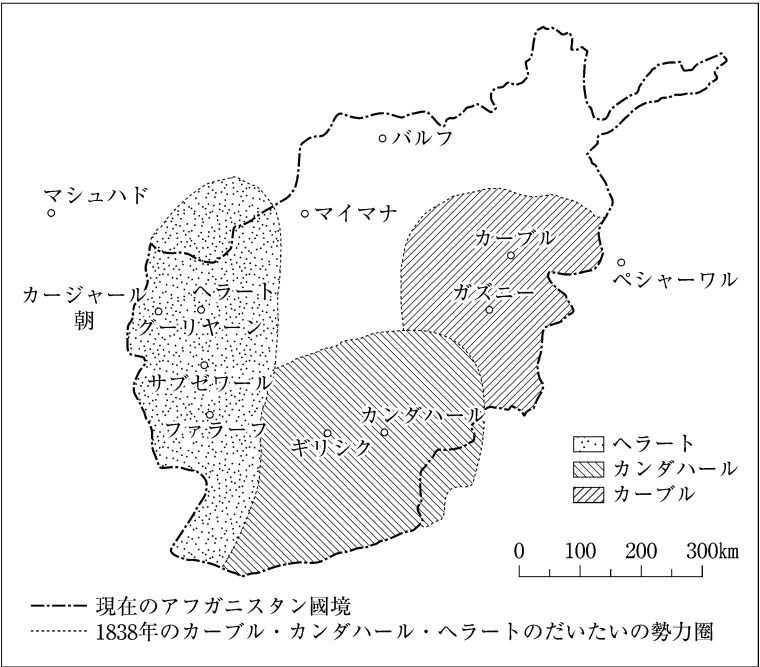
ま と め

「アフガン内亂」以降のヘラート政權は弱小勢力に過ぎず、カージャール朝やカンダハール、カーブルといった周邊諸勢力から絶えず狙われていた。特に、支配者であったカームラーン王子がそのような難局を乗り切るだけの十分な能力があったわけではなかったので、絶えず危険にさらされていたといえよう。そのような中で宰相となったヤール・モハンマド・ハーンは、實質的にその難局を乗り越えていかなければならない責務を負うことになった。

ヤール・モハンマド・ハーンは卓越した外交術を身につけていたものと思われる。たとえば、カンダハールに攻められると、カージャール朝にホトバとコインにそのシャーの名を用いることを條件に救援を求めたが、實際にその約束は守らなかった。一八三七年のカージャール朝によるヘラート包圍の際には、一方で強硬に抵抗するとともに、他方では英國と交渉してカージャール朝に干渉するように求めた。

第一次アフガン戦争中には、カームラーン王子のような無能な支配者では難局を乗り越えられないと悟ったのか、ついには彼を排除して殺害した。ヤール・モハンマド・ハーン自身は王族でもなく、いわゆる「支配の正統性 legitimacy of rule」を持っていたわけではなかった。しかし、それにもかかわらずヘラート政權のような弱小政權をその後も八年間にわたって存続させたのは、彼自身がきわめて優れた政治的才能を持っていたことを物語っている。彼はヘラートのような弱小政權の運営には成功したが、後繼者養成には成功しなかったようである。彼の急死によって状況は一變し、ヘラートは周邊諸勢力に狙われることになり、その獨立はきわめて危ういものになったのである。

最後に史料について一言述べておきたい。英國側史料は外交文書であり、きわめて網羅的な記述が豊富であり、その有



〔地圖〕 1838—1842年のアフガニスタン

Yapp, M.E; *Strategies of British India—Britain, Iran, and Afghanistan, 1798 -1850* (Oxford, 1980) p. 649 掲載の地圖を改變

サッドーザーイー朝

1	2	
Aḥmad Shāh	Teimūr Shāh	Homāyūn Mirzā
(1747-1772)	(1773-1793)	
	4.6	
	Shāh Maḥmūd	Kāmrān Mirzā
	(1799-1803,	[1829-1842]
	1809-1826)	Jahāngir Mirzā
		Jalāl al-Dīn Mirzā
	[1826-1829]	
	Firūz al-Dīn Mirzā	Malek Qāsem Mirzā
		Moḥammad Yūsof Mirzā
		[1855-1856]
	3	
	Zamān Shāh	Qeīṣar Mirzā
	(1793-1799)	
	5.7	8
	Shāh Shoḡāʾ al-Molk	Faṭḥ Jang Shāh
	(1803-1809,	(1842)
	1839-1842)	(年代)；在位年代
		[年代]；ヘラート統治年代

用性には疑いが無い。しかし、外交文書という性格上、推測や思惑、あるいは英國の利害を反映した記述が多く含まれていることを當然見落としてはならない。利用の際にはそういった点を注意すべきであろう。ペルシア語史料については、現在一般的に利用可能なものの中では、アフガン側のものでもイラン側のものでも、*'AW*を除いて、ヘラートを中心に取り扱ったものはほとんどない。そのため、一部の時期を除いてヘラートについての言及はあまり多くない。このため、ペルシア語史料だけを用いて一九世紀中期のヘラートについて検討することはきわめて難しい。上記の英國側史料などと併用して検討しなければならないのが實情といえよう。

註

- (1) 本稿において、「アフガニスタン」とは、一九世紀後半以降、近代國家として形成されてきた、現在の「アフガニスタン・イスラーム共和國」に相當する國家、あるいはその領域を指すこととする。「アフガン」とは「パシユトゥーン」とも呼ばれるアフガニスタンで多數を占める民族（アフガン人）を指すこととする。ただし、「アフガン内亂」、「アフガン戦争」は歴史學上の用語として用いる。この点については、拙稿「最近のアフガニスタン近代史研究動向」ノエル「一九世紀アフガニスタンの國家と部族」を中心に（『上智アジア學』一六、一九九八、九〇頁、註（一）を参照されたい。
- (2) アフガニスタンのペルシア語（ダリー語）の轉寫については、Кусеиова, Л. Н. и Микоянчук, В. М.; *Дару-Русский Словарь* (Москва, 1978) に原則として準據する。
- (3) イランのペルシア語の轉寫は慣例に従う。
- (4) Fekrat, Mohammad Āsof (Haravi); *Zahir al-Doule-ye Haravi* (Atsah, Ī. ed.; *Nāmāre-ye Doktor Mahmud Āshtar*, vol. 6, Tehran, 1370/1991-2), pp. 3221-3241
- (5) Champagne, D. C.; *The Aḡḡān-Irān Conflict over Herat Province and European Intervention 1796-1863: A Reinterpretation* (Ph. D. diss., Univ. of Texas, 1981)
- (6) Annan, A.; *The Herat Question* (Yarshater, F. ed.; *Encyclopaedia Iranica*, vol. 12, 2003), pp. 221-222
- (7) Noelle, C.; *State and Tribe in Nineteenth-Century Afghanistan—The Reign of Amir Dost Muhammad Khan (1826-1863)* (Surrey, 1998). なお、同書に引くのは、上述拙稿「最近のアフガニスタン近代史研究動向」を参照されたい。
- (8) これらのアフガニスタン側史料については、拙稿「近代

史——國家形成過程」(鈴木均編『ハンドブック現代アフガニスタン』、明石書店、二〇〇五)一五九—一六〇頁の文獻解題を参照されたい。

- (8) L/PS/9/99' タブリーズ發、一八三六年七月一六日附、Elis 發 Palmerston 宛て文書。
- (9) L/PS/9/101' テヘラン發、一八三七年一月二二日附、McNeill 發 Macnaghten 宛て文書。なお、後述のモハンマド・シャーのヘラート包圍中においてもヘラート市内に駐在していたボッティンガー少佐も、實權はヤール・モハンマド・ハーンが掌握していることを傳えている。
L/PS/9/104' ヘラート發、一八三七年九月二八日附、Pottinger 發 McNeill 宛て文書。
- (10) L/PS/9/106' ヘラートの陣營發、一八三八年五月一二日附、McNeill 發 Palmerston 宛て文書。
- (11) L/PS/9/108' ヘラートのシャーの陣營發、一八三八年八月二三日附、Stoddart 發 McNeill 宛て文書。
- (12) L/PS/9/110' エルズルム發、一八三九年三月二二日附、Sheil 發 Palmerston 宛て文書。
- (13) L/PS/9/112' テヘランからの書簡の要旨の英譯、一八三九年八月二六日附。
- (14) L/PS/9/114' エルズルム發、一八四〇年二月六日附、Sheil 發 Palmerston 宛て文書。
- (15) L/PS/9/119' トラブゾン發、一八四一年七月一日附、Sheil 發 Palmerston 宛て文書。
- (16) 一八四一年一月には、ケーブルに一八三七年以來駐在

していたバーンズ A. Burnes 大尉が暴徒に自宅を襲撃されて殺害され、同年二月にはケーブル駐在のマクナグテン W. Macnaghten 公使が暗殺されるなど、イギリス側をめぐる治安は相當悪化していた。

- (17) それは次のようなものであった。「今月五日にヘラートから到着した使者がペルシア政府にもたらした情報によれば、シャー・カームラーンはヘラートの要塞でヤール・モハンマド・ハーンに降伏し、ヤール・モハンマドはコーランに誓ったが、彼はその大部分を直ちに破った。結果としては、水腫 (dropsy) がかなり進んだ段階にあるカームラーンは彼の宰相の掌中で捕虜になっているようだ。それゆえ、ヤール・モハンマド・ハーンは今やヘラートで絶對的な權力を掌握しており、二五萬ポンドにもほるカームラーンの寶石や財寶を所有するに至った。……ヤール・モハンマドがモハンマド・シャーにいつまでもおね續けるかについては、大いに疑問のあるところである。」
L/PS/9/121' テヘラン發、一八四二年三月九日附、McNeill 發 Aberdeen 宛て文書。
- (18) L/PS/9/123' ヘラートの有力者の一人が一八四三年二月一日頃マシユハドで書いた書簡の英譯。
- (19) L/PS/9/125' テヘラン發、一八四四年二月一四日附、Sheil 發 Aberdeen 宛て文書。
- (20) これは、ヤール・モハンマド・ハーンの娘をドースト・モハンマド・ハーンの息子に嫁させ、ドースト・モハンマド・ハーンの娘をヤール・モハンマド・ハーンの息子に嫁

させるものであった。このことは、以下のイギリス側文書にも出ている。L/PS/9/125¹ Sheil 中佐のマシユハドからの書簡の英譯、一八四四年二月一六日附。

- (21) L/PS/9/136¹ テヘラン近郊の陣營發、一八四八年八月二四日附、Farrant 發 Palmerston 宛て文書。

- (22) L/PS/9/126¹ テヘラン發、一八四四年二月一四日附、Sheil 發 Aberdeen 宛て文書。

- (23) サラーールの反亂については、とりあえず Ādaniyāt, F.; *Amīr-e Kabir va Irān* (Tehān, 6th ed., 1983), pp. 231-247 などを参照されたい。

- (24) L/PS/9/134¹ テヘラン發、一八四七年九月二五日附、Sheil 發 Palmerston 宛て文書。

- (25) なお、サラーールの反亂が繼續中の一八四八年九月にモハンマド・シャールが没して、ナーセル・アッディーン・シャール Nāser al-Dīn Shāh (在位：一八四八—一八九六) が即位した。

- (26) L/PS/9/137¹ テヘラン近郊の陣營發、一八四九年六月二四日附、Farrant 發 Palmerston 宛て文書。

- (27) ただし、稱號の件については、次のようなイギリス側文書がある。「本日のヘラートに關するテヘランの公報の要約を閣下 [外相 H. T. Palmerston] にお送りすることを光榮とするものである。『……ヤール・モハンマド・ハーン・ザヒール・アッドウレ (これは彼の稱號) はベルシア政府の許可を得てヘラートから彼ら [スイースターンのバルーチー人] に軍隊を派遣した。……』この文章の中で、

ヤール・モハンマド・ハーンにベルシアの稱號が與えられており、彼があたかもベルシアの臣下であるかのように言及されている。」L/PS/9/142¹ テヘラン發、一八五一年三月一六日附、Sheil 發 Palmerston 宛て文書。この文書にもあるように、イギリス側もヤール・モハンマド・ハーンが「あたかもベルシアの臣下」のようであると認めているおり、彼がカージャール朝との關係を強化していったことは間違いないようである。

- (28) L/PS/9/138¹ テヘラン發、一八四九年一〇月一八日附、Farrant 發 Palmerston 宛て文書。

- (29) L/PS/9/141¹ テヘラン發、一八五〇年二月二〇日附、Sheil 發 Palmerston 宛て文書。

- (30) L/PS/9/142¹ テヘラン發、一八五一年三月二五日附、Sheil 發 Palmerston 宛て文書。

- (31) 彼の名前にについては、NT や RSN などのイラン側史料ではセイド・モハンマド・ハーン Sayid Moḥammad Khān と記されており、アフガニスタン側史料でも、TS ではサイエド・モハンマド・ハーン Sayed Moḥammad Khān と記されている。本稿では、AW と ST に準據して、サイード・モハンマド・ハーンとする。

- (32) L/PS/9/143¹ エスファハーン發、一八五一年七月一七日附、Sheil 發 Palmerston 宛て文書。

- (33) L/PS/9/144¹ エスファハーン發、一八五一年八月八日附、Sheil 發 Palmerston 宛て文書。

- (34) このあたりの事情については以下の別稿を用意しており、

そちらを参照されたい。小牧昌平「近代アフガニスタン國家の形成過程―ヘラートの事例を中心に」(假題、掲載誌未定)。

(35)

ドースト・モハンマド・ハーンは、ヘラート陥落から約二週間後の六月九日に没した(AW74, ST2-78)。享年七十二歳であった。

the honorific titles of Sanqi changshi or Hongluqing came to hold judicial offices at the same time. Judging from the fact that the court rank of the original posts of the members on foreign missions were higher than the ranks of the honorific judicial posts they received, it is clear that the chief purpose of the shift of the provisional offices for members on foreign mission to judicial posts was not intended to raise their ranks, but it should be understood as aimed at enhancing the prestige of the mission by borrowing the prestige of judicial offices. This is the most important characteristic of the honorific titles for those on foreign missions during the latter half of the Tang.

Furthermore, judging from the situation of the changes in posts after their return from abroad, honorific titles for those on foreign missions were ultimately only a provisional device for officials when they were abroad and were unrelated to domestic transfers and changes of office. Once they returned from abroad, the title lost all validity.

On the other hand, in addition to honorific titles, *ci zifei yudai*, the grant of the purple or scarlet pouch for a fish-shaped talisman, was also awarded to those on foreign missions in the latter half of the Tang. This seems likely to have been a continuation of the system of *jiezi* 借紫 (“borrowed” purple) and *jiefei* 借緋 (“borrowed” scarlet) for those on foreign missions that was found in the ordinances of the Kaiyuan era. In other words, considering the extraordinary gap between the court rank of the main post of those sent on a foreign mission and the court rank associated with the *ci zifei yudai*, the system of the *ci zifei yudai*, like that of honorific titles, seems to have been one of provisional ranks that was in effect only while the official was abroad and designed to raise the status of those on the mission.

YĀR MOḤAMMAD KHĀN IN HERĀT: THE POLITICAL RELATIONSHIP BETWEEN IRAN AND AFGHANISTAN IN THE MID-19th CENTURY

KOMAKI Shōhei

There were three regional powers, Kābul, Qandahār, and Herāt, in 19th century Afghanistan. Yār Moḥammad Khān Alikozaʾī was the minister of Kāmraṇ Mīrzā, who ruled the city of Herāt in western Afghanistan. Herāt was incessantly

attacked by Qandahār and Kābul. Qājār Iran also sought to occupy it if an opportunity presented itself. Kāmrān Mīrzā appeared to be a drunkard and an incompetent ruler, incapable of coping with the difficulties that faced Herāt. Yār Moḥammad Khān managed to deal with the problems of Herāt in place of Kāmrān Mīrzā. Moḥammad Shāh Qājār marched on Herāt in November, 1837 and besieged the city for seven months. Yār Moḥammad Khān resisted the Iranian forces and British, who seeking to prevent Iranian and Russian influence in Afghanistan, had intervened in the Iranian action. Because of these reactions, the Iranian army had to evacuate Herāt in June, 1838. Amidst this complicated situation, Yār Moḥammad Khān finally killed Kāmrān Mīrzā and took control of Herāt in August, 1842. Yār Moḥammad Khān tried to maintain Herāt in its now weakened state. He managed, for example, to maintain good relations with Kābul and Qandahār through matrimonial alliances. He continued to fear Qājār Iran because the Iranians had not abandoned the idea of occupying Herāt. However, in 1847 the Sālār revolt occurred in Khorāsān, which adjoins Herāt. As a result, the governor of Khorāsān was confined in the capital, Mashhad, and Yār Moḥammad Khān marched to Mashhad to rescue him, and then escorted him to Herāt. His action contributed to the suppression of the revolt, and the Iranian Shāh was pleased to give him the title of *Zahīr al-Doule* (Assistant of State). Yār Moḥammad Khān strengthened not only the relationship with Qājār Iran, but also with other surrounding powers, such as Kābul and Qandahār. But in these complex circumstances, Yār Moḥammad Khān died suddenly in June, 1851. Owing to his sudden death, Herāt was again faced with a difficult situation. His son and successor, Saʿīd Moḥammad Khān was not as talented as his father, and so the surrounding powers, especially Qandahār, tried again to occupy Herāt. Saʿīd Moḥammad Khān was killed in September, 1855, and the political situation of Herāt remained confused for several years. Eventually, Herāt was occupied by Dōst Moḥammad Khān of Kābul in May, 1863.

ON THE ORIGIN OF THE EIGHT-BANNER *NIRU* AND THE CLASSIFICATION OF THE *NIRU*

KICENGGE

Focusing on the issue of the succession to the office of *Nirui janggin* (Zuoling 佐領), the chief official of a *niru*, in this article I consider the origin and historical